

一

次の各問いに答えなさい。

問一 次の各文の——線部のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

- 1 気温がキュウゲキに下がる。
- 2 たんぱく質がホウフに含まれている。
- 3 みんなの絆はキョウコなものだ。
- 4 この地域ではヨウサン業が盛んである。
- 5 試験の成績が返ってきた。
- 6 緑黄色野菜を多く食べる。
- 7 必要な物を調達する。
- 8 大人しく、従順な犬だ。

問二 次の四字熟語の□に入る漢字を一字で答えなさい。

- 1 大器□成
- 2 理路□然
- 3 □石混交
- 4 一念□起
- 5 晴□雨読

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「芝居はわかるんだけど、踊りの観方がわからない」

と、おっしゃられるお客さまが最近増えてきました。

江戸や明治の頃は、家の近所に踊りの稽古所がたくさんありました。長唄、常磐津、小唄、義太夫の音も聞こえる。I、自己流

のベンベンで、ひどい調子で弾いていたとしても、おのずと聞こえてくるので、だれもが、邦楽について耳になじんでいる。踊りもしよ  
つちゆう、いろんなところでお稽古している、お祝い会も頻繁にあるような様子だったのでしよう。II、みなさんがごく自然になじ  
んでいらした。

踊りを観るのは、理屈ではありません。

A「ああいいね。やはりいいね」

でいいわけです。

III、踊りや三味線の音が、今お客さまの周囲から消えていますから、なかなか「いいね」と言っていただけない。

今で言えばカラオケでしょうか。カラオケに熱心な方のハレの舞台と言えば、「NHKのど自慢」ですね。昔から、毎週日曜日にやっている  
あの長寿番組を見ると、玄人の凄さを感じます。相当うまい素人さんがいても、最後にプロの歌手が二人うたと、「これは、違」と、みん  
な思われるでしょう。IV、プロは、うまいものです。「のど自慢」と同じで、歌舞伎座へ来れば、最高の邦楽が聴けて、最高の踊りが

観られるようであればいいと思います。

「いいね」と言っていただけなのは、他の理由もあるかと思えます。学校教育の弊害だと思のですが、ものを観たり鑑賞するときに、  
まず X、することが第一になってしまっているところがあるのではないでしようか。

日本人は理解するよりも、感じて生きてきました。日本は、四季にあふれた美しい国です。春は桜、夏は涼み、秋はお月見をする。冬は雪  
見をする。見るだけではありません。自然を楽しんで、「風薫る」とか「におうような美しさ」とか、シカクに嗅覚を混ぜて、五感で感じる  
力を、日本人は本来持っていました。現代では、その自然を受け止める感性が、奪い取られてしまっています。

紅葉を理解しよう、桜を理解しよう、お月様を理解しようとは思いませんよね。その風情を楽しむ、味わう。

「月にむらくも叢雲、花に風」という言葉もありますね。

月が出るCと雲が出るし、花は風が吹ふいて散ってしまう。それをはかないと感じるのは、理屈ではありません。感覚なのです。

踊りも同じです。まず理解してかかろうと思う時点で、踊りを鑑賞する方法から外れてしまっています。理解できないと、イコールわからないになってしまう。これは、日本人の感性にとって、たいへんな損失だと、ぼくは思っているんです。

しかも、日本人の多くは多神論者で、川にも神様がいる、山にも神様がいる、石にも神様がいると信じて生きてきました。「お天道様に申し訳ない」という言葉がありますね。自然に対して「申し訳ない」っていう気持は、「人間なんてそんなに偉えらいもんじゃない。自然のおかげで生きてる」。そういう謙けん虚きょな精神しんにつながっているように思います。

ありふれた日常のなかにある季節感に、今の日本人は、目を向けてないですよ。そういう感覚を日本人全体がもう少し取りもどしてくれと、踊りのよさを説明しなくても、味わってもらえるようになるのではないかと思います。

日本人は「何とも言えず、さまがいいね」と言いますでしょう。「理屈じゃないけど品がいいね」「なんか居住まいのいい人だね」とも言いますよね。これは、説明できないことです。**なにより**、ぼくら自身が踊っていて、理解されようとは思っていません。極きょく端たんに言えば、踊りっ

ていうのは二十分観て、なんて素敵な時間だったんだろうと、そう思っていただけはいいわけなんです。

(坂東三津五郎『歌舞伎の愉しみ』)

問一 —— 線部①～③のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 空欄  ～  にあてはまる語句として適切なものを、それぞれ次のア～オから選んで記号で答えなさい。

ア ですが                    イ ですから                    ウ なぜなら                    エ たとえ                    オ やはり

問三 —— 線部A「ああいいね。やはりいいね」とありますが、この言葉を言いかえるとどんな言葉が適切ですか。本文中から書きぬきなさい。  
い。

問四 —— 線部B「今お客さまの周囲から消えています」とありますが、なぜ消えているのか。主語を明らかにしてその理由を答えなさい。

問五  に入る言葉は何ですか。本文中から抜き出しなさい。

問六 —— 線部C「雲」とありますが、雲のでき方について左のように説明しました。空白に入る言葉を答えなさい。

雲は、空気中の「」と「ちり」、そして「温度が」という3つの条件によってできる。

問七 本文中の「**なにより**」と同じ用法の「なにより」を使って短文を作りなさい。ただし、解答には主語と述語を必ず使いなさい。また、本文の語句や文を利用しただけの解答は不正解とします。

問八 この文章は何を楽しむ方法について書かれているか答えなさい。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

試合が終わった。そして、豪<sup>A</sup>自身の野球もたぶん……終わった。

来年は中学に入る。入学予定の新田東中にもむろん野球部はあるけれど、入部するかどうか、決めかねていたのだ。

野球は好きだった。四年生から地元の少年野球チーム新田スターズに所属し、二年間、野球とけっこう密に付き合ってきた。好きだと思う。観るのもやるのも、他のどんなスポーツよりおもしろいと感じていた。

だけど……もう、いいか。

新田スターズでずっと一緒<sup>いっしょ</sup>だった沢口<sup>さわぐち</sup>や東谷<sup>ひがしたに</sup>は当然のこととして野球部への入部を決めている。

「豪も一緒にやるじゃろ？」

昨日、沢口に問われた。頷<sup>うなず</sup>くことができなくて、曖昧<sup>あいまい</sup>に笑ってごまかした。

「永倉さん。おれも一年後には追い掛<sup>か</sup>けて中学生ですから。待っててください。おれ、また永倉さんに捕<sup>と</sup>ってもらいたいです」

この一年間、バッテリーを組んでいた関谷<sup>せきや</sup>にも言われた。試合終了の直後で、敗北<sup>くや</sup>の悔しさからなのか、炎天下<sup>えんてんか</sup>の試合を投げ抜<sup>ぬ</sup>いた疲労<sup>ひろう</sup>からなのか、関谷の両眼はうっすらと充血<sup>じゅうけつ</sup>していた。そのときもごまかした。「追い掛<sup>か</sup>けて中学生って、なんか変な言い方じゃな。演歌<sup>えんか</sup>っば過ぎねえか」なんて言いながら、関谷の赤い眼から視線をそらしたのだ。

野球に関しての問い掛けや願望を真っ直ぐに投げ付けてくる者の言葉が鬱陶<sup>うつとう</sup>しい。ほんのちよっぴりだけど煩<sup>わづら</sup>わしい。

野球はおもしろい。好きだ。だけど、もういい。ここまでで、諦<sup>あきら</sup>めよう。

そんな思いが胸の内にわだかまって、息を詰<sup>つ</sup>まらせる。県大会のずっと以前から続いていた息苦しさだった。地区の代表として大会に出場できるのが誇<sup>ほこ</sup>らしくて、嬉<sup>うれ</sup>しくて、まずは目前<sup>まへま</sup>に迫<sup>せま</sup>った試合のことだけを考えようと、胸<sup>むね</sup>に痞<sup>つか</sup>え、喉<sup>のど</sup>を塞<sup>さい</sup>ぐ息苦しさを忘れようとした。

それもまた、ごまかしだったのだと豪が気付いたのは、しばらく後のことだった。

ともかく、最後の試合が終わった。否応<sup>いやおう</sup>なく、未来と向き合わなければならぬ。

中学に入ったら、勉強に重点をおく。

母と約束していた。

「だって豪、仕方ないが。医学部にいくんだったら、がんばらんとね。中学校に入ってからじゃ遅いぐらいなんよ」

母からくどいほど言われている。豪の父親は総合病院の院長を務める医師だった。母は、一人息子が父親と同じ職業に就くことを強く望んでいたし、豪自身、母の意向に抗うつもりはなかった。

少し重いだけだ。

仕方ない。そうだ、確かに仕方ない。野球は好きだけれど、愉快ではあったけれど、諦め切れないほどじゃない。そんなに、大切なものじゃない。たっぷり楽しんで、最後に県大会まで出場できた。一回戦を勝ち抜いた。そんなチームでキャッチャーの大役をずっと担ってきた。

キャプテンの責任も何とか果たした。充分だ。充分過ぎるぐらいだ。おれはおれなりに、がんばったじゃないか。

自分に言い聞かす。

「豪、涼しいとこでアイス、食おうや」

東谷が声を掛けてきた。「おう」と答えた。それからミットとスパイクをバッグにしまい込む。

監督に呼ばれたのは、バッグを持ち上げた瞬間だった。

「豪」

「はい」

振り向く。新田スターズの監督の選手以上に日焼けした顔が、生真面目に引き締められている。

説教されるのかと思った。

監督の指導は的確で巧妙で、この監督だったから県大会までこられたと得心する部分はあるのだけれど、反面、練習や試合中に叱咤や激がとぶことが多く、その厳しさに嫌気がさして辞めていく者が何人もいた。

だから、今、負けた試合について、おまえは何をどう反省するのだと詰問されるのだと身構えたのだ。

「まだ時間があるから」

監督はぼそりと聴き取りにくい呟きを漏らした。叱咤や詰問の驚きは、いささかも含まれていなかった。

「え？ 時間って？」

「帰りのバスが来るまでまだ時間があるからな」

「はい……」

監督の顎がグラウンドに向けてしゃくられる。

「豪、次の試合に出るピッチャー見てみや。一回戦観たかぎりでは、ちょっとはんぱじゃないぞ」

「ピッチャーを……ですか」

グラウンドに視線を移す。

真夏の陽光にさらされて、ほとんどの色彩を奪われている。整備のため水を撒かれ、土は黒々と濡れているはずなのに、白っぽく漂白されて見えるのだ。

マウンドは陽炎の向こうにあった。ゆらゆらと揺れ動いている。何だか現の場所ではなく蜃気楼を見ている気分だ。それほどに熱い。これから、灼熱のマウンドに立たねばならないピッチャーに、心底同情してしまう。

あそこで投げるのかよ。気の毒に。

「見ておけ。そうめったにお目にかかれる代物じゃないけん。あの球を見られるんなら、県大会まできた甲斐もあるってもんじゃ」  
真顔のまま監督が続ける。その表情は、豪が思わず頷いてしまうほどに真剣だった。

へえ、そんなにすげえやつなんだ。

身体は疲れていた。正直、見も知らぬ他人の試合を観るより、球場の周辺で葉を茂らせ、涼やかな木陰を作っている木々の下で、東谷達とアイスでも舐めていたかった。

でも、そんなすごいピッチャーなら……。

見ておくのも悪くない。

野球もこれで最後だ。最後の最後に県大会で試合ができた。いい思い出だ。そこに、もう一つ、「ちょっとはんぱじゃない」ピッチャーの姿を付け加えておくのもいいかもしれない。そいつが、本当にすごいやつだとしたら、甲子園やプロやあるいは大リーグで活躍しないとも限ら

ないじゃないか。そしたら……うん、話のタネぐらいにはなるかもしれない。

『おれな、こいつがまだ小学生のとき、投げてるの見たことあるんじゃないぞ。そうじゃなあ、やっぱ、はんぱじゃなかったな』  
なーんて、ね。

「わかりました。帰り時間ぎりぎりまで観戦します」

「そうか。じゃこれ、渡わたしとこう。各チームのメンバー表が印刷してある」

「あ、はい。メンバー表ですか」

「ただ観るだけより、名前がわかった方が試合がおもしろくなる。野球って、そういうもんじゃ」

これからグラウンドで戦う見知らぬ少年達は、それぞれに姓せいと名を持つ。当たり前のことだけど、時としてそれを忘れる。ただのピッチャーであったり、セカンドであったりする。そうじゃない。誰だれにも名前と生身がある。それぞれがそれぞれに野球に対しているんだ。この二年間、技術や試合運びとともに、監督に教え込まれたことだった。

監督からメンバー表を受け取る。豪は笑顔で頭を下げた。

唸うなりが聞こえた。

小さなボールが空気を切り裂さく音だ。

なんだ、あれは……。

いつの間にかスタンドとグラウンドを隔へだてるフェンスを掴つかんでいた。

金網かなあみが指に食い込む。

なんだ、あれは……。

心臓せいが迫せり上がってくる。鼓動こどうが胸むねを突き上げる。

県大会二回戦、第三試合。

マウンドは曇気楼などではなかった。生々しい現実だった。たった一人のピッチャーがそのことを豪に突き付ける。

ここは、現実の場所。確かに存在するのだと。  
鮮やかだった。

① そのピッチャーが一球を放つ度に、マウンドはくつきりと際立った色合いを帯びて、網膜に突き刺さってくる。舞い上がる砂ぼこりさえ煌めいて鮮やかだ。揺蕩うこともぼやけることもない。

放たれた一球が真っ直ぐにミットに届く。その軌跡もまた鮮やかだった。

目を射り、心底を刺す。

投球フォームというものがこんなにも心を騒がすものだなんて知らなかった。一球がこれほど鮮烈なものだとも知らなかった。まるで知らなかった。

なんなんじゃ……あの球は。

試合の展開などまるで頭に入っていない。どうでもよかった。ただマウンドに立つ一人のピッチャーだけを見つめていた。そのピッチャーが放つ球だけを見続けていた。

これが野球か。これが野球、これが一球を投げること……だとしたら、すげえ。

知らなかった。まるで知らなかった。おれは何も知らず、野球と戯れていたただだったんだ。そうか、これが野球なのか。これがピッチャーというものか。これが一球を投げることなのか。今、わからせてもらった。でも……だとしたら、だとしたら……。

一球を捕るってことは、キャッチャーであることは、どうということなんだ？

いつの間にかミットを抱えていた。いつ、バグから取り出したのか記憶になかった。

ストライク。バッターツ、アウト。

主審のコールが響く。どこからか、短い溜め息が聞こえた気がした。豪自身のものかもしれない。

この試合、何個目かの三振を奪ったピッチャーが駆け足でマウンドを降りてくる。目を瞠るほど大柄な少年ではない。上背も横幅も自分の方が勝っているだろう。

なんて、あんな球が投げられるんじや？

細身の、華奢にさえ見える身体のどこから生まれてくる力なのだと、豪は目を凝らす。ダッグアウトの数歩手前で、少年の足が止まった。帽子の縁に手を掛け、すっと顔を上げる。眼が合った。

そう感じた。ミットを強く掴んでいた。束の間、おそらく一秒か二秒、確かに視線が合わさった。背筋が冷えていく。

後ろから走り寄ってきたキャッチャーに声を掛けられ、少年は軽く頷くと足早にダッグアウトに消えた。

捕りたい。

衝動に身体が震えた。ミットを掴んだ手も、フェンスに掛けた指も、立っている脚も震えた。小刻みに震え、止まらない。

捕りたい。

受けない。

あの球を自分のミットで捕らえてみたい。

捕球したその瞬間、どんな感覚が身を貫くのだろうか。

捕りたい。どうしても。

それは、豪自身が戸惑うほどの激しい衝撃だった。生まれて初めての経験だ。自分の内で新しい自分が頭を上げる。あるいは、目覚めていく。

あのピッチャーに向かって、マスクをかぶりミットを構えている小柄なキャッチャーが羨ましくならなかった。妬ましくさえある。

五、六球に一度、キャッチャーは受けそこねて前にボールを零す。後ろにそらすことも何回かあった。捕え切れないのだ。あれでは、全力

投球はできないだろう。

何でだろう。

E  
歯噛みしそうになる。

何でちゃんと捕ってやらのじゃ。

おれなら……おれなら、あんな真似はしない。どんな球でも必ず受けてやる。あのピッチャーに全力で投げさせる。最高の一球をおれのミ

ツトで……。おれなら、おれがキャッチャーでさえあったなら……。

「豪」

鞆かばんを引っ張られた。沢口と東谷が立っていた。東谷がさらに腕うでを引っ張る。指がフェンスから離はなれた。

「バスが来たぞ。帰ろう」

「え?」

「え?じゃねえがな。バス。迎むかえのバスが駐ちゅうしや車場に來たんじゃ。みんな、もう乗り込んで。おまえを待まちつとるんじゃぞ。早はやう来い」  
腕うでを振り払はらう。

「帰らん」

「はあ?」

「おれは帰らん。この試合を全部観るまではここにおる」

「はあ?」

沢口と東谷が顔を見合わせる。沢口が眩まいしいものを見るように目めを細こまめた。<sup>③</sup>

「豪、だってバスが來とるんじゃぞ。みんな、待まちつとるし……」

「構かまわん、先に帰かえつてくれたらええ」

「そんなこと、できるわけねえじゃろ。豪、おまえな、どうしたんじゃ? みんなが待まちつとるってわかって」

「先に帰かえれって!」

いいから、構かまわなくてくれ。他のことなんてどうでもいいんだ。今、あの球を見ることより他に意味のあるものなんてないんだ。

見る?

見ている?

いいのか、それでいいのか。スタンドでただ見ているだけ。おまえはそれでいいのか、豪。声が聞こえる。自分の声だ。

いいのか、それでいいのか。

いいわけがない。おれは捕りたいのだ。キャッチャーでありたい。

自分の声に答える。正直に答える。

おれは、あの球を捕らえる者でありたい。あいつのキャッチャーでありたい。

足元に落ち、踏み付けていたメンバー表を拾い上げる。あの一球を目の当たりにしてから、何度も何度も確かめたピッチャーの名前を呟いてみる。

①はらだたくみ  
原田 巧。

(あさのあつこ『ラスト・イニング』)

問一 —— 線部①～③の語句の本文中での意味として適切なものをそれぞれあとのア～エから一つ選んで、記号で答えなさい。

① 担って

ア 荷物をもって      イ 行動をして

ウ 大切にして      エ まかされて

② 嫌気がさして

ア 無理だという気持ちがして      イ もう嫌だと思ふ気持ちになって

ウ できないという気持ちでして      エ あきらめる気持ちになって

③ 目を細めた

ア うれしいことがあった様子      イ 監視する様子

ウ 驚く様子      エ 関心を向ける様子

問二 —— 線部A「豪自身の野球もたぶん……終わった」とは、どういうことですか。説明しなさい。

問三 —— 線部B「はい」とC「はい」では豪の気持ちに変化が起きています。その理由を答えなさい。

問四 —— 線部D「激しい衝撃」とは、どのような気持ちですか。答えなさい。

問五 — 線部 E 「歯噛みしそうになる」のは、なぜですか。文章中の言葉を用いて答えなさい。

問六 — 線部 ㉑ 「キャプテン」、㉒ 「そのピッチャー」、㉓ 「少年」、㉔ 「原田巧」の中で異なる人物を一つ選んで数字で答えなさい。

問七 — 本文の最後、「豪」は野球を続けたのでしょうか、野球をやめたのでしょうか。どちらかを選んで、そう考えた理由も答えなさい。